

<追 悼>

大村潤四郎先生を偲んで

田 口 順 子

3月6日の朝、日本PT協会の高橋事務局長から大村潤四郎先生訃報の電話を受け一瞬、茫然とした。

昨年の10月6日、霞ヶ関ビルで行ったPT・OT協会20周年記念行事は成功裏に終了したが、大村先生のお顔が見えず会のご報告に一度お伺いせねばと、すっかり終わった残務の中でそのことだけが気になっていたのである。ご自宅へのお電話で入院なさっておられることは存じていたが、退院も間近かであのこやかで泰然としたお姿にお目にかかれるものと信じていたのに。

3年前に開いた国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院の20周年記念祝賀会にはおいで頂いたが、先生のその時の慈愛に充ちた笑顔が忘れられない。「清水さん、よくここまでやったネ」と、もう今は私の旧姓など知る人の少ない中でそう呼んで下さった。わが国初のリハビリテーション学院の発足に際して九州の(故)中村裕先生の下で指導を受けていた私を東京に引っ張り出して下さったのも当時、国立療養所課長をしてらした大村先生のご配慮であった。私のPT人生のきっかけを与えて下さったお二人の恩人を共に失ってしまった。

先日、金森国立療養所課長にお目にかかった折にも「あの人がいなければリハビリテーション学院は出来ていなかった」と言われたように、大村先生は常に人材育成を最優先された方であった。ご自分の優秀なお嬢様をOTになされたことも身をもってPT・OTの育成に尽された証拠であろう。当時のリハビリテーション学院長であった砂原茂一先生は「蘭学20年」の中で、「当時の療養所課長、大村潤四郎先生は日本のお役人には珍しく役所のしきたりより事柄の軽重についての自分の判断を重んじる人で、随分、無理をきいてくれて大蔵省を説得してくれた」と感謝の言葉で述べておられる。

最近、再び全国的にPTとOTの併用が診療報酬上問題となっているが、随分以前から当局はこの辺が認識できないらしい。大村先生は当時のOT協会長、鈴木

明子先生と厚生省へ陳情に出かけられ、当局の技官を東大病院作業療法室の実際場面にご案内されて併用の必要性を了解させたというエピソードもある。昭和56年の診療報酬改訂では医科、薬価基準の大幅なダウンが行われたのだが、その中にあってリハビリテーション関係は技術料の尊重、適正評価という考え方から80%もの引き上げが行われた。これとて大村先生の地道な厚生省説得があつてのこと、改めて思い当るのである。リハビリテーション診療報酬改正に当っての先生のご努力は「理学療法と作業療法」14巻2号で詳しく知ることができる。また同じ記事の中で一技官の回想として先生ご自身のリハビリテーション行政への動機や変遷を書かれておられるが、すでに昭和35年に「医学的リハビリテーションに関する現状と対策」についての報告書を出しておられ、翌年、来日したニューヨーク大学、Dasco博士によって脳卒中のリハビリテーションに火が点ぜられ、その際もたれた会合で、今、一番何をすべきかという先生のご質問にDasco博士は「PT・OTの養成である」と答えた。これを受けてそれから2年後の昭和38年には先生はわが国初のPT・OT養成校を清瀬の地に設立されたのである。

そして、今、PTは6,000名を越え養成校は45にも達し、その数は世界第2位となった。大村潤四郎先生の蒔かれた一粒の種はそれほどに成長したのであるが、創設期も終りこれからは日本独自のリハビリテーション創出期に入ろうとしている時、先生のご逝去は大きな力を失った感じがして残念でならない。リハビリテーション史に名の残る方が亡くなられた。

大村潤四郎先生の生前のご功績とご指導に感謝し、ご冥福をお祈りしつつ、先生のご期待にこえたていかねばと決意を新たにするのである。

(神奈川リハビリテーション病院 理学療法士)